А.П.Осроват.

土壌主義の研究について（ドストエフスキーとアポロン・グリゴーリエフ）

１８６０年代初めの、「時代」と「世紀」の出版当時におけるドストエフスキーとグリゴーリエフの相互関係は幾度となく文学において分析されてきた；しかしながらこの問題は、十分に研究されつくしたとはいえないのだ。ドストエフスキーとグリゴーリエフ自身がいかに土壌主義の概念を解釈してきたかということに対するより一層の関心を払わなければならない。

我々の注目すべきテーマの方向性は、両者の青年時代―４０年代の思想的な論争におけるドストエフスキーとグリゴーリエフの位置づけの類似にある。この世紀の主要な思想的葛藤はロシアの社会的思想に相対的な差異を設けていた≪スラヴ主義≫と≪西欧主義≫のアンチノミーによって決定付けられる。

内面的な矛盾（А.И.Герцен と Т.Н.Трановский、А.С.Хомяков と К.С.Аксаковым）は、原則的な議論の契機において両者の敵対陣営の団結を証明するものではない；≪我々≫と≪我々ではない≫という２つのタイプの表現は定着しており、社会的な理解を受けていた。対立者たちがお互いに論争を行っていた非妥協性は、ある程度において、同時代人が２者選択的というよりも≪ロシア―西洋≫という風に別の問題解決を与えるということが滅多にないという事実を喚起した。

２つの対照的なジンテーゼを結果的に方向付けたのは В.Ф.Одоевский だった。それともある程度に同様のものを４０年代の П.А.Вязяемский の世界観が特徴付けを行っている若い世代の代表者達となったのが―ドストエフスキーとグリゴーリエフである。

戯曲≪２つのエゴイズム≫と詩≪Олимпий Радин≫は１８４５年にグリゴーリエフによって描かれたものであるが、既に指摘したとおりに、一度にスラヴ主義的なイデオロギーとロシアのフーリエ主義の受容をパロディー化している。しかしながら１８４５年の終わりかあるいは１８４６年の始まりにグリゴーリエフは≪正教とスラブ的な精神≫（彼自身の表現によると）に関するいくつかの批評を書き、別の観点からすると１８４５年から１８４６年にかけて、ユートピア的社会主義者達の作者への疑いなき影響を反映させた詩作品「街」を書いた。≪ペテルブルグ時代のグリゴーリエフは―後になって А.Брок は記述している―その本質において同意しかねる仲間のニックネームそのものだった。≫

同じような矛盾は４０年代のドストエフスキーの視点にも固有のものだ。彼のスラブ主義者たちに対するネガティヴな対応は１８４５年に手紙の中で書かれ、そして１８４７年（ペテルブルグの手記）、１８４９年（Хомяков と К.Аксаков 宛ての А.Н.Плешеев の攻撃的な手紙に対する同情的な反応）にも行われている。しかしながらその年のペトラシェフスキーサークルの≪金曜会≫の参加者たちは≪貧しき人々≫の作者を民衆的原理の擁護者であり、民衆のために働く暴力的革命に対する反抗者と追想している。

しかしながら一方では他のペトラシェフスキー会員たちもドストエフスキーを―非合法

蜂起の中にいたらなあ≫。その結果としてドストエフスキーは、共産制大生活共同体の思想を弾劾した（これは下品なトリックではなかった、というのも彼はそのことをペトラシェフスキーでの集会の際に話していたからだ)。しかしながら「社会主義は…多くの科学的効用をもたらした」とも表明している。この見解はスラブ主義者の歴史哲学的なコンセプトを伴った世界観との類似を表している。

互いに相容れない思想に対する感受性と、自由に修正を行い、すぐにそれらを嘲笑う準備（しばしば嘲りのあとには―再びそれらを信じきる）―これらすべては４０年代におけるドストエフスキーとグリゴーリエフの反ドグマ性に関して言える事だ。彼らは二人とも≪我々≫側と≪我々ではない≫側の明確な差別を行い、自らの支柱となる公理を権威付けしていてそれらに対する対応としては（内面的に合致している構造）疑いも皮肉も許されてはいない閉鎖的な思想体系だとして同じようにスラヴ主義と西欧主義を否定した。

ここから、「ペテルブルグの手記」において首都のサークルに関して語られる際の軽蔑的なトーンが生まれている：≪皆それぞれに自分の規則、自分の礼儀、自分の法則、自分の論理と自分の神託の神がいた≫。１８４６年にグリゴーリエフが、誇りがないでもなく「短い職歴書」に書いたことはあながちでもないのだ：「…詩や短編で無駄なことを言い、手のつけられないほど馬鹿なことを言った。しかしながら自分のことであり、サークルのことではない」。ドストエフスキーとグリゴーリエフはサークル第一主義そのものと「想像上でしかないキマイラ」、つまりはあらゆる論理的な建造物とを結び付けていた。スラヴ主義者と西欧主義者の抽象的な知性を重んじているのは、現実の人生に対する≪直接的な要求≫である；そしてこの方法によってのみ、人間の主要な課題の解決が思考されるのである―「自分自身から芸術作品を作り上げるべきであり」、それはなぜなら人生が丸まる１つの芸術だからである。

しかしながら他のサークルで言われていた具体的な思想に対しては、２人の若き文学者たちは好んで武装している。それは極めて自分の人生の現象に対する一致として評価されている。理念はある意味においてはパロディー化された理念の文脈から遠ざかり、その結果として、最新のグリゴーリエフの指摘によると、別の形で現れるのである。≪論理に縛れつけられていないすべての思想はその自由さによって自分の力を失ってしまうが、しかしながら恐らく多くの点で真実さにおいて勝るのだ。≫

あらゆる完全性―あるいは探求的な完全性―世界観に、いつも互いに結びつくことのないばらばらの視点を対置しながら、それでもしかし必ず生活の最上界に根付いて、ドストエフスキーとグリゴーリエフはこのようにして、４０年代に土壌主義の土台を基礎付けたのである。

土壌主義はぴんと張り詰めた結び目に最終的には５０年代の後半に熟することになるドストエフスキーとグリゴーリエフの最も神聖なる信仰を結合させた。２人の文学者達は何よりもまず「ロシアの理念」に関する共通の発言によって親しむようになった。１８５６年にドストエフスキーは A.H.Майков に宛てて書いている。≪ヨーロッパとその使命をロ

シアが終わらせるという思想を分割すること≫。その３年後にグリゴーリエフはM.П.Паｒонин と、ロシアの文学―詩的な原理が世界を一新するという意見（しばらく熟慮され、予感されてきた）を分かち合っている。この観点はしかしながらスラヴ主義的な位置づけの変遷を証拠付けるものではないが、しかしながら社会的な意識におけるドストエフスキーとグリゴーリエフのより大きな西欧主義と西欧主義の復活に対する感受性とを意味するものだ。

彼らの見たところによると西欧主義者は以前の通り―≪理論家≫であり、≪書斎の研究者≫であって、全ヨーロッパの崇拝者である。その他にもドストエフスキーが記述したところによると西欧主義者たちはすべての民衆性を「１つの共通的なタイプ」に合流させることを望んでいて、その名の下に≪我々の民衆のこのような特別性を奇形の形に嵌め込み、その特別性というものは西欧主義の未来の自立的な発達を担保として作り出しているのだ。≫グリゴーリエフは直ちに民衆性の撲滅に関する思想を、≪抽象的な単調である形式的な礼服的な人間性に関する思想と結び付けている。一体社会的なブラウスが、今はなき忘れえぬニコライ・パープロヴィチ皇帝の軍服よりもいいのだろうか、そして共産制大生活共同体が皇帝の兵舎よりもいいのだろうか？それは本質的にはまったく同じことだ。≫（あらゆる中央集権は専制政治と同様であるという批評に関する理論を参照されたい―「ニコライのだってロベスピエールのだって、同じことだ…」）

ドストエフスキーとグリゴーリエフのスラヴ主義に対する対応は土壌主義の自己意識の中に結集している。スラヴ主義は（西欧主義と同様に）―≪頭でっかちの反射的な生産物であり、≫その信奉者たちは―≪理論家≫なのだ。そしてもし２人の文学者たちが、最初にロシアに適合する民衆性の概念を考え出したスラブ主義者たちに当然性を与えたとのではあるが、彼らは、スラヴ主義は現実的な実際性を捨象しており、≪狭い、約束事のほとんどピューリタンのような理念≫や、≪何らかのバレエのような装飾や、美しいが、しかし正統性がなく抽象的なもの≫を作り出したと見なしている。土壌主義者の≪民衆的な原理≫は≪１つの農民性≫にのみではなく、≪工業国としてのロシア≫にも位置づけられていた。

注目すべきことは土壌主義者たちが、初期のスラブ主義者に存在した≪民衆的原理≫の担い手としての特別に肯定的な性質をほのめかすことを拒否していたということだ：わけあって、美徳によって老齢が負わされていたК.Аксаковのドラマ、≪ルポビツキー公≫の中で、グリゴーリエフは明らかに酔っ払いのЛювим Торцовを好んでいた。土壌主義者たちはスラブ主義の中にエリート的尊大さを感じており、彼らは≪民衆を教化しようとして≫、民衆自身には無関心だったと見なしている。ドストエフスキーとグリゴーリエフはスラブ主義の空虚さと、そこには実用的な行動性に関する欠片も存在しないということについて議論している。

スラブ主義と西欧主義の論争において、志向性の選択（民族主義的かあるいはヨーロッパ的か）は多くの点において対立者の哲学的仮定によっていた：理念的なものがその第一

であり、唯物論的なもの（あるいは詩的唯物論的なもの）が第２であった。ドストエフスキーとグリゴーリエフはこの意味において言うまでもなく、スラブ主義に近かった；しかしながら土壌主義の世界観は、自己を公にしながらも、意図において同様の拠り所となる衝動を受け入れなかった。土壌主義者たちはスラブ主義（直感的認識）と西欧主義（過激的認識）の対立を無視した。なぜならばこの２つの方向性は互いに相対するものではあるが、しかしながら―生活のモデルは全ての多様な人生に対して同一性を要求することは出来ないからだ。ロシアの社会的な思考の解決にとって太古から存在する西欧主義のアンチノミーの思想を受け継ぎ、土壌主義もまたそのアンチノミーについて思索している。≪論理と生活：それはまさに現代における西洋と東洋である≫。論理に対する最終的な判決は１８６０年にグリゴーリエフが行っている：≪論理は総計して、過去の知性から生まれたものであり、過去に対する関係においてのみ正しいのであって、それによって論理は生活によってと同様に支えられている；一方で過去のものは常に死体であり、そこでは解剖学が魂を除いて全てを目にすることが出来るのだ。≫

６０年代最初にドストエフスキーとグリゴーリエフを結びつけた中間駅は―土壌であり、その課題はドストエフスキーによって以下のように形成されている：≪完全に道徳的に民衆と結合する必要があり、出来るだけしっかりと民衆と合流して道徳的に彼らと１つの集合体になるべきなのだ。≫そして既に行われたこの発言に関してグリゴーリエフも語っている:「我々は、スラブ主義や西欧主義のような学者仲間なのではない:我々は民衆なのだ。」

しかしながら土壌主義的な理念は，以下のように宣言されている―本質的には，キリスト教的な戒律によって組織された共同体に関するスラブ主義者の声明，あるいは全社会的な共産制大生活共同体に生活している人間のユートピア性よりも思弁的でないということはない。あらゆる体系や概念作用み対応する総合的なスペクシスにおいて―抽象的な思想となったのは，その必然的な属性だった―土壌主義的な世界観において現実化したものは，結果的に土壌主義の階級的な計画性であり、結果的にそれは決して組成された具体性になることはなく，最大の抽象概念の形態を表す。そして原則的には土壌主義の原則的な本質は，ロシア国家の出来事における名残をなくして創作されねばいけないものであり、その輪郭は―際限なく続くものであらねばいけなかった。

このことはグリゴーリエフを当惑させなかった：≪力≫や≪未来≫を、彼はちょうど≪理念が際限なく拡散したものであり，理念は信仰であり、人生と民衆に対すす信仰である。≫ドストエフスキーもまた，ゴリゴーリエフの最大主義が土壌主義にとって，６０年代初めのロシアの社会的思想における特別なイデオロギー的分派として致命的であると理解していた。そしてドストエフスキーとグリゴーリエフとのすれ違いは，彼が（活動的にМ.М.Достоевский と Н.Н.Страхов によって支持され、しばしば促されていた）自身の組織を持っていた方向性自身の保存の名（「土壌」，「世紀」）や，自身の同志や相対的にはっきりと意味付けされた対立者や精神的な価値観のヒエラルヒーや自身の政治の名において，土壌主義の≪浄化≫のために犠牲になることを準備していたということに根をおろしてい

た。「時代」や「世紀」の実際的な活動は，検閲や読者の意見に対する避けがたい歩み寄りや、妥協や，言い残しや，「同時代人」（批評家の性格付けによると「トュシノの陣営」）との一時的な遮断をもたらした論争的な戦術をふくめて短いものであり、土壌主義の全ての機能は，グリゴーリエフの意見によると，≪完全なる真実≫に対する突進を一つのサークルの緊急的な配慮によって交換し、この現象を曲解したものである。(グリゴーリエフは「ペテルブルグにおけるドストエフスキー」を，その中でサークルとサークルの政治が辛辣に冷笑されたものとして思い出すかもしれなかった。)

≪―グリーゴーリエフは「時代」の出版当時に記述している―神や蓄財の化身のために働いてはいけない：哲学や歴史や詩を認めてはいけない，「同時代人」と仲良くなってはいけない，文学を尊敬しながら，Кусаков を印刷し、反吐の出るような Минаев のフェリエトンを始めてはならない、そして安っぽい自由主義のために Стеньк Радин の政治を支持してはならない。いくらかの良い戯曲のように Гейбель やその他を出版してはならない。≫このような土壌主義の枠組みはグリゴーリエフにとって，他のあらゆる方針の枠組みのように明らかだった。ドストエフスキーによって明らかだったのは，≪グリゴーリエフは世界において一つの編集室に留まる事は出来なかっただろう。もしも彼に一つの雑誌があれば、彼は自分でそれを約 5 ヶ月後には潰してしまっただろう。≫あたかもドストエフスキーの予見を予測していたかのようにグリゴーリエフは記述している：「そうです，私は実行者ではありません、フョードル・ミハイロヴィチ！…私はロシアの文学に対する憂鬱と酷い嫌悪の時期には大酒をあおり，乞食のようになる事も出来ますが、―しかしながら心のそこから信じているような人生に対する一行の詩も書くことは出来ないのです…」

このコンテクストにおいてもっともなことは「時代」の寄稿者（ドストエフスキーの兄弟達やストラーホフ）と雑誌からの逸脱を幾度となく行なっていたグリゴーリエフとの間の対立の先鋭化である。グリゴーリエフは，ストラーホフが「世紀」の中から「スラヴ主義が勝利した」と宣言した１８６４年の１２月までは生きてはいなかった。このフレーズは結局のところグリゴーリエフ的な精神の土壌主義の拒否を意味したのだ。

６０年代最初におけるドストエフスキーとグリゴーリエフとの相違は研究者達によって既に指摘されている：我々には，二人の相互作用の今後の分析は，我々が以上で性格付けようと試みた土壌主義の外面的なパラドクスを考慮に入れなくてはいけないと思われる。

А.П.Осроват. К ИЗУЧЕНИЮ ПОЧВННИЧЕСТВА // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том3. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.С.144-150
訳：桃井富範